

近代日本の宗教——仏教を中心に——

桂島 宣弘

今年の大会シンポジウムは「近代日本の宗教——仏教を中心に」をテーマとしています。大会委員会を代表してテーマの趣旨説明を行っていきたいと思います。このテーマを選定するに当たって、大会委員会が意識したことは、いうまでもなく日本思想史学と現代社会・現代日本との接点を考え、日本思想史学が積極的に社会・日本に発信していくことであります。今回は、現代社会が直面している数多くの問題の中でも、われわれはとりわけ巷間で話題となることの多い「生命倫理」の問題や、「自然・環境」の問題などを意識しましたが、それらを思想史的・倫理学的に検討していく上でキーワードとなったのは、「宗教」と「学術」でありました。「宗教」が日本思想史上で最大の問題領域を構成していることはいうまでもありませんが、われわれがここで意識したのは、「宗教」が日常生活における倫理意識・生命観（死生観）・自然観の基盤に位置していることは当然としても、それらが実は歴史的に形成された認識・思想として、さらにいえば、近代国家を意識した場合には、「国家」がそれを制度化し、あるいは学術化していくことで、いわば近代国家・近代学術との関係において形成された意識として存在し、われわれの倫理意識・生命観・自然観に作用していることでもあります。「宗教」は、宗教家・思想家のテクスト上、あるいは信仰者の信仰内に存在するものであることは当然と

しても、思想史学が同じく切開しななければならないのは、このような意識・信仰を構造化する歴史的作用であるといえます。

こうした観点から近代日本・近代宗教を捉えた場合、いうまでもなく近代国家は、何よりもその国民意識の醸成のために、「宗教」を統制・管轄しようとしてきました。近代日本の場合には、それは「国家神道体制」とよばれることが多いといえますが、そのため主として「神道」研究にこれまででは終始してきた観があります。それは決して不当なものとはいえませんが、前近代までの日本において圧倒的な影響力を誇り、実は近代以降、現代に至るまでわれわれの倫理意識・生命観・自然観に影響力を与え続けている仏教が等閑視される弊害を生み出してきました。「近代仏教」という研究ジャンルが近年衆目を集め、また本日の報告者や末木文美士氏らによって新しい研究が次々と発表されている状況は、こうした状況を打破するための積極的な試みであるといえますが、同時に実はわれわれの倫理意識や生命観・自然観が深刻な反省を迫られている中で、それに作用している「近代仏教」の存在が無視できなくなったことも関係している動向であるといえるでしょう。また、当の「国家神道」の研究においても、実は「神道」が翻訳語としての「宗教」概念の成立、さらにそうした「宗教」たらんとしての仏教とのせめぎ合いの中で形成されてきたことが明らかにされています。天理教などの民衆宗教研究・新宗教研究においても、「教派神道」としての神道的存在と捉えられがちでありましたが、布教現場では実は仏教勢力とのせめぎ合いが熾烈であり、それとの対抗によって教義が形成されたことが実証的に示されるようになっていきます。この意味では、近代国家と「宗教」や「国家神道」を検証し、さらには前近代までの伝統的意識を踏まえつつ、現代に至るわれわれの倫理意識・生命観・自然観を明らかにしていくためには、今や「近代仏教」を組上らなければならぬといえます。

ところで、「近代仏教」を考える場合、われわれは現在までの研究状況も加味して二つの切り口を考えました。一つは、既にのべてきたことでありますが、学術編制との関連から「近代仏教」を捉えることであります。近年の研究では「翻訳概念」としての「宗教」概念が、近代の「国家神道体制」にどのような作用を及ぼしたかが注目されるようになりましたが、この視点は「近代仏教」についても影響を与えつつあります。われわれ

が用いている「仏教」、すなわち「通仏教」概念は、明治期の「宗教」概念、さらには「神道」概念の成立とも密接に関わりながら形成されてきたものであることは、たとえばJ・ケテラーの『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』（ベリかん社、二〇〇六年。原著一九九〇年）が明らかにしているとおりですが、われわれは、これをさらに検証するためには、宗教学・仏教学の形成という学術編制が「近代仏教」にどのような規定性をもったのかを明らかにする必要があります。このことによって、「近代仏教」の歴史性が一段と鮮明になるとともに、「近代仏教」の思想的・研究のための前提が与えられるものと考えます。この点については、近世・近代日本宗教史・近世陰陽道の研究で著名な林淳氏に報告をお願いしました。近代宗教学・近代仏教学の形成・確立に関わって積極的に発言している林氏は、『季刊日本思想史』七五号での「近代仏教」特集号の責任編者の一人であり、そこでも精緻な近代仏教研究史をまとめておられます。「近代仏教」と学術編制との関係を検討する上では最適任者であると思います。

第二に「近代仏教」を国際的な視点、具体的には東アジア的視点から捉えることが重要になっています。それは、一方では先にのべた倫理意識・生命観・自然観の国際研究を、それらの重要な基盤の一つである仏教との関連で行うためには不可欠な作業であるといえますが、それ以上にわたくしたちが意識したのは、戦争と侵略に「近代仏教」が重要な役割を果たし、恐らくは戦後の東アジア全域の仏教のありようにも作用・影響を強く及ぼしていることです。この点もまた、今日の仏教の歴史性を捉えるためには見逃してはならない視点だと考えます。それを考えるためには、帝国として存在していた近代日本の「宗教」「仏教」を、ポストコロニアルの視点からも捉え返す必要があります。この点は、近代仏教研究、戦後宗教者平和運動などで成果を挙げている大谷栄一氏に報告をお願いしました。大谷氏も『季刊日本思想史』七五号での「近代仏教」特集号の責任編者の一人ですが、とりわけ近代日本の日蓮主義運動の研究で著名です。

以上、大塚沢山の内容を盛り込みすぎた感がありますが、一言で日本思想史学においても、現在盛んになってきた近代仏教研究の成果を見つめ直すことが重要になってきたということだと思えます。これまでは、儒教・神道研究にやや重点をおいてきた感のある日本思想史学において、倫理意識・生命観・自然観などの、い

わばわれわれにとっては定番のテーマを考えるためにも、近代仏教研究から学ぶものは多いと思います。佐藤弘夫氏は、「宗教の時代」として近代を捉えるという、いうなれば、これまで「世俗化の時代」と捉えられてきた近代観を根本的にひっくり返すことの重要性を主張されています。このシンポジウムが、そうした視点転換の場となれば幸いです。以上、簡単ではありますが、趣旨説明とさせていただきます。

(立命館大学教授)